

論文

キリスト教紙芝居における福音的観点からの考察(5) —キリストの受難と復活を扱った作品を中心に—

柴田智世

1. 研究の目的

本研究では、キリスト教紙芝居を保育に取り入れる際の一つの方向性を探っていきたい。一般の紙芝居を保育に用いることと比べて、キリスト教紙芝居が困難を伴うのは、聖書に基づいて作成されているがゆえに、保育者は、まず聖書を理解するところから始めなければならないという点である。キリスト教紙芝居の物語を分析するには、一般的には、聖書と註解書を読むことから始め、当時の時代考証、物語の意図するところの適切な理解など、いくつかの要素を考慮する必要がある。

本稿では、保育者や学生が、キリスト教紙芝居を福音的に理解し、保育に活かしてくための手掛がかりとして、作品の意図を詳細に分析していくことを行う。

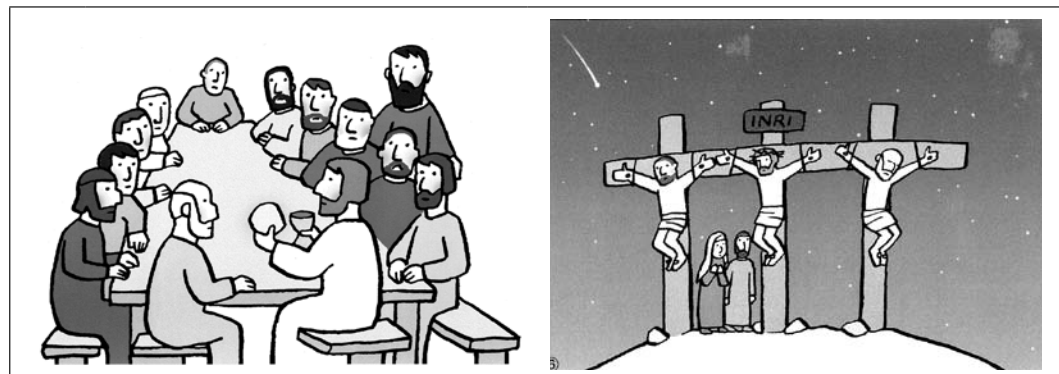
2. 研究の方法

本研究では、キリストの受難と復活を扱ったイースターの紙芝居5作品を取り上げる。各作品の比較・特徴を考察し、更に聖書の註解書に基づいて、福音のメッセージを探る。

3. 結果

各作品について場面ごとの分析を行った。それらを次の表に示す。

作品1. 「イエス様の十字架と復活」文・大越結実、絵・G・エヴラール、V・グロベ
 いのちのことば社 CS 成長センター、2005年〔聖書箇所 ヨハネによる福音書第12章12～19節、13章1～20節、マタイによる福音書26章26～29節、ルカによる福音書22章39～46節、47～53節、23章32～49節、50～56節、ルカによる福音書24章1～10節〕



場面	本文より要旨を抜粋	気付いた点
1	イエスがロバに乗ってエルサレムにやってきた場面である。大人も子どもも、大きな声で喜び歌う。	⇒ロバに乗ったイエスが中心に描かれ、町の人々が棕櫚（しゅろ）の葉を振って歓迎する。
2	過ぎ越しの祭りの食事の場面である。イエスは弟子たちの足を洗い始める。ペテロは驚いて「イエス様に足を洗っていただくなんて、もったいないことです」と言う。イエスは、自分が手本を示したこと、あなたたちも威張らないで互いに親切にするようにと述べる。	⇒イエスは膝をついて身を低くし、弟子の足を洗う。他の弟子も神妙な顔でイエスの行動を見守る。 聖書の内容をかなり簡略化して描かれている。
3	いよいよイエスと弟子たちとの食事が始まる。イエスはパンとぶどう酒を分けてお祈りをするが、祈りの言葉の意味が弟子たちには理解できない。	⇒12人の弟子たちは、食卓でイエスを囲み、彼の祈りに集中して聞いている。後にイエスを裏切ることになるイスカリオテのユダについては、一切ふれていない。
4	食事が終わり、イエスは弟子たちとゲッセマネの園へ行く。イエスは間もなく自分が捕えられて十字架にかかることを知っていた。イエスはひざまずいて神への祈りを捧げる。	⇒イエスがなぜ十字架につけられることになるのか、理由が記述されている。また、祈りの言葉が聖書の本文とは異なり、子どもに理解しやすい訳で記述されている。また、絵では真剣に祈るイエスと、木の下で居眠りをしている弟子たちの姿が対照的である。
5	そこへ大勢の人が物々しくやってきて、弟子であるユダが合図をすると、	⇒紙芝居や聖書の本文では、大勢の人が現れたと書かれているが、絵では省略されている。ま

	<p>イエスは捕らえられる。</p> <p>6 ゴルゴタの丘で、イエスが罪人2人とともに十字架にかけられる場面である。イエスは自分を十字架にかけた人々のために、神への祈りを捧げる。</p> <p>7 イエスは息を引き取る。そして、アリマタヤのヨセフがイエスを墓に納める手はずを整える。その様子をイエスを信じる2人の婦人が見守る。</p> <p>8 イエスが亡くなって3日後の朝、婦人たちが準備していた香油を持って墓に行くと墓の入り口の大きな石が取り除けられ、中にあるはずのイエスの体がなくなっていることに気づく。そこへ神の使い(天使)が現れて、イエスはよみがえられたと告げる。</p>	<p>た、ユダの行為の目的や行動の背景への記述も省略されているため、保育者は子どもに説明を補足することが望ましい。その際、ユダが必要以上に悪者扱いにならないような配慮も必要と思われる。</p> <p>⇒3つの十字架が立てられ、イエスはその真ん中で張り付けになる。この状況でのイエスの祈りの言葉は、読者に印象を与えるだろう。</p> <p>⇒イエスの死に際し、心ある3人が埋葬を行う。</p> <p>⇒事態は急展開する。亡くなった人がよみがえるとは、非常に信じがたい。しかし、婦人たちは天使からの言葉を聞いて大喜びでこれらの出来事を弟子たちに知らせに行く。</p>
考 察		
<p>絵はイラスト調で、非常にシンプルである。観客である子どもにとっては、分かり易い描き方であると思われる。</p> <p>作品中の本文は簡潔な文章であるため、子どもたちは受け止めやすいのではないかと感じた。この作品の特徴の一つとして、ユダに焦点を当てない描き方をしている点が挙げられる。話を讀んだ観客である子どもは、ユダに対してイエスを裏切った張本人というレッテルを貼らずに、紙芝居の話そのものを味わう効果も期待できよう。</p>		
聖書との整合性		
<p>ヨハネ、マタイ、ルカによる福音書から、それぞれイエスの十字架と復活について書かれている箇所の要点をピックアップして、紙芝居の話を作っている。</p> <p>本文中のセリフの多くが、聖書からの引用であるイエスの言葉である。弟子たちや登場する人々の会話が少ないことは、子どもに人物の会話を創造させたり、気持ちを想像したりする余地を与え、聖書のお話の豊かなイメージを育むことになると思われる。</p> <p>紙芝居では婦人たちは、天使から受けたよみがえりのイエスのことを、皆に伝えに行ったという結末で終わっている。聖書ではこの話は続いていくが(ルカ24:13~53、マルコ16:12~20、ヨハネ20:11~29)、紙芝居の話の続きを、聖書の枠にとらわれず、子どもたちと想像しながら共有することも可能性としてあるだろう。</p>		

作品2. 「イースターのできごと」文・城倉 啓、絵・藤本 四郎

キリスト教視聴覚センター、2007年〔聖書箇所 マタイによる福音書第26章14節～第27章66節、マルコによる福音書第11章1節～11節、ルカによる福音書第23章32節～第24章53節、ヨハネによる福音書第2章13節～22節、第20章19節～29節〕



場面	本文より要旨を抜粋	気付いた点
1	エルサレムの町には、逾越しの祭りに来た人で大変にぎわっている。ロバに乗って神殿に向かっていくイエスを、人々たちは王がやって来たかと歓迎する。	⇒祭りの様子が描かれ、老若男女を問わず、群衆が集っている。イエスは人々からの盛大な歓迎を受ける。
2	イエスは神殿で商売をしていることに憤る。売られている物やハトを台ごとひっくり返す。イエスは、神殿は神に祈る場所であって、商売をする所ではないと力強く言う。	⇒話の雰囲気が急に変化する。イエスがこのような手荒な言動をすることに、観客である子どもは驚くだろう。それほどまでに、イエスは憤慨しているということでもある。
3	ある晩、大祭司たちはイエスを捕えようと相談し合う。そこへイエスの弟子であるユダがやって来て、力を貸したいと申し出る。	⇒大祭司と数名の者たちが話し合っているところにユダが登場する。大祭司は、ユダに対し銀貨30枚を支払うことを約束する。
4	翌日、イエスは弟子たちと夕食を共にする。イエスは、近いうちに自分を裏切るものがあると、弟子たちは慌てて否定する。	⇒イエスを中心に食卓を囲んでいる。ユダはイエスの向かい側に座り、口を結んでイエスを見つめている。
5	夕食後、イエスと弟子たちは祈るための場所に出かけていく。イエスは必死に神への祈りを捧げるが、弟子たちは眠り込んでしまう。	⇒イエスは自分の命が狙われていることを予期して、神に真剣に祈る。遠くから、たいまつを持った群衆の灯りが近づいて来る。
6	群衆の中にいたユダがイエスに挨拶をするという行為を通して、群衆たち	⇒紙芝居の絵では、イエスとユダの挨拶する場面が中央に書かれており、右側には物々しい雰

	はイエスを捕える準備にとりかかる。	囲気の群衆が身構えている。また、イエスの後ろには怖くなって逃げだす弟子がいる。
7	翌日、捕らえられたイエスの裁判が行われる。ローマのピラト総督は、人々を鼓舞させるように、イエスの十字架刑の是非を問う。	⇒人々はイエスを目の前に、裁くべきだとの世論が高まる。ピラトは、自分の責任ではなく、皆がイエスを十字架にかけると言ったから、そのようにするのだと、責任逃れをしている。
8	イエスは他の2人の罪人と共に十字架につけられる。群衆たちは意地悪な言葉をイエスにぶつけるが、イエスは神に皆を赦すようにと祈りを捧げ、息を引き取る。	⇒十字架刑の凄惨な場面である。イエスを罵る群衆と、彼らへの赦しを乞うイエスの姿は対照的である。
9	場面が変わり、日曜日の朝である。弟子たちがイエスのお墓に行ったところ、お墓が開いており葬られたはずのイエスの姿がないことに気づく。そこへ白い服を着た若者が現れ、イエスは蘇られたこと、ガリラヤでイエスに出会うことができると他の弟子に伝えるようにと言う。	⇒困難な境遇で、神様に助けを求めるラケルの信仰的な態度が伝わる。
10	同じ日の夕方、二人の弟子が歩いていたところにイエスが現れる。弟子たちはこの出来事を帰って他の弟子にも伝えたが、皆は信じられなかった。	⇒二人の弟子の間にイエスが現れ、イエスは自分が蘇ったことを、力強い声で明言する。
11	8日後、イエスは11人の弟子たちのところに現れる。弟子たちは非常に喜び、イエスを信じる。イエスは弟子たちに聖霊を授け、世界中の人々にいつまでもなくならない命を伝えるようにと言う。	⇒これまで弟子たちはイエスのよみがえりを信じるができなかった。しかし、皆の前にイエスが姿を現したことで、弟子たちはこれまでの愚かな言動を悔い改めて、イエスに従って生きていく決心を告げる。
12	イエスは弟子たちの見ている中、天に昇っていく。弟子たちはイエスによって新しい命を与えられたことを確信し、イエスの十字架と復活をたくさんの人々に伝える。	⇒弟子たちは非常に大きな喜びで満たされ、その後、彼らは福音を伝える働きを担っていく。

考 察

紙芝居ケースの「解説」欄にも書かれているように、イエスの十字架と命の復活を通して救いの道が実現したことに着目したい。詳しく述べると、人々からイエスは救い主であると讃えられてきたが、ある時を境に人々はもちろんのこと、一番身近にいて生活を共にしてきた弟子

たちからも裏切られてしまう。掌を返したように心変わりをしてしまう人間の弱さは、話の中だけのことではなく、私たちにも十分起こりうることである。また、イエスは私たち人間の弱さを理解しており、悔い改めて従おうとする者には、惜しみなく無条件の赦しを与える方である。イエスは、自分に敵対する者を愛するという愛の手本であり、「解説」欄にあるように、私たちも同様に実践していくようにと求められているのであろう。

この作品は場面展開が早いため、演技手は話の流れや当時の時代背景を事前に把握しておく必要がある。例えば、場面9において、弟子たちがお墓に向くところがある。この弟子は、イエスに香料を塗るという信仰に基づいた行いのために墓に行ったのである。挿絵では弟子は手に香油の壺を持っていることから、弟子の行動の意味を演技手が補足することが望ましいと思われる。

聖書との整合性

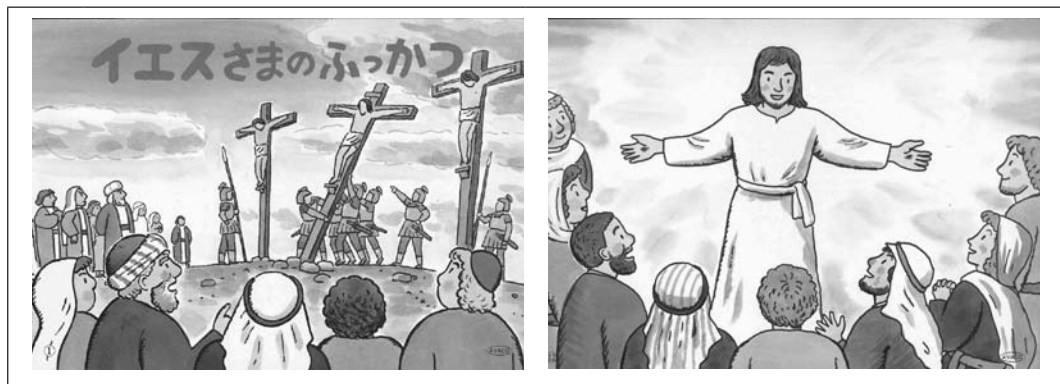
本作品の土台となっている話は、聖書の四福音書（マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ）全てにおいて取り上げられている。聖書箇所も長いので、聖書を読む時間を要するが、保育者は一通り聖書を読んでおく必要がある。そのため、未信者の保育者にとっては、この作品を子どもたちに演じる手前で、敷居が高いと感じてしまうことが危惧される。紙芝居を通して、聖書の教訓的、教育的意義を子どもに与えなければならぬと気負ってしまうと、負担になりかねない。そのため、保育者は単純にひとつの作品として紙芝居を演じる場合と、子どもとのやり取りを踏まえながら、そこで感性豊かな子どもたちから挙がってくるつぶやきや発想、想像、感想を拾い上げつつ、子どもと一緒に話を味わうという方法のように、複数の演じ方により話が広がり、紙芝居を楽しむことができると考える。

作品のタイトルは「イースターのできごと」であるが、本文中にはイースターという言葉は書かれていない。そのため、イエス・キリストの十字架と復活の一連の出来事をイースターと呼んで喜び祝うということ、子どもたちに説明することも必要であろう。

聖書では四福音書すべてにおいて、イエスが葬られた後の安息日の朝に墓を訪れたのは、婦人であったとの記述がある。本作品では、婦人として絵では描かれているが、「女性（の弟子）たち」の用語を避け、すべて「弟子」としている」と紙芝居のケースに書かれていることも特徴的である。これは、ケースの記述によると、弟子の一人ひとりの個性に目を注ぎすぎずに、十字架と復活のイエスのみが目立つように工夫した結果であるとのことである。

作品3. 「イエスさまのふっかつ」文・景山 あき子、絵・藤本 四郎

キリスト教視聴覚センター、1995年〔聖書箇所 マタイによる福音書第27章57節～第28章10節〕



場面	本文より要旨を抜粋	気付いた点
1	罪人たちが十字架にかけられている。その中の一人にイエスの姿がある。兵隊たちはイエスを罵倒するが、イエスは神に彼らの赦しを祈り求める。	⇒冒頭から荒々しい雰囲気でも物語が始まる。
2	真昼だというのに急に空が真っ暗になる。イエスは自分の魂と命を神に委ねる祈りを捧げて息を引き取る。その後すぐに地震が起き、人々は恐ろしさに慌てている。	⇒イエスは大きな声で祈りの言葉を述べる。地震と共に、神殿の幕が二つに裂け、人々は慌てふためく。
3	通りがかりの人々は、死んだイエスを下から眺めながら、口々に言葉を交わす。イエスを批判する者、肯定する者がそれぞれ意見を言う。	⇒3人目の人は、イエスが死刑になった原因や経緯について触れた言葉を口にする。
4	離れていたところで十字架にかかるイエスをずっと見ていた別の3人の女性が、おそろおそろ近づき、十字架の下にひざまづく。	⇒3人はイエスに対し、畏れ敬う態度で描かれ、イエスの行いや人柄を偲んでいる。
5	夕方になり、アリマタヤのヨセフがイエスの埋葬を申し出て、準備をする。	⇒イエスが埋葬される場面を見て、女性たちは、ほっとした様子で見守っている。
6	3人の女性は明日は安息日のため、明後日の朝早くに、もう一度墓に来て、イエスの体に香油を塗る約束をしながら家路に向かう。	⇒3人の会話から、イエスを慕う気持ちが話から伝わり、穏やかに話が進んでいる。
7	兵隊たちは、イエスの亡きがらを盗む人がはいけないと、夜通し墓の番をする相談をする。	⇒数名の武器を持った強そうな兵隊たちが、暖をとりながら話し合っている。
8	日曜日の朝になる。6の場面に登場した女性3人が、約束通りに香油を持って墓に向かう。	⇒自分たちの手で、墓の前の大きな石を動かすことができるか、番兵がそれを許可をするのか心配している。
9	墓に到着し、墓石が動かされて脇に転がっていることに気づく。墓の中をのぞきこむが、イエスがいないことに3人は慌てて助けを呼び求める。	⇒3人の心配していたこととは異なる事態に急展開する。
10	すると、急に白い服を着た若者が現れる。若者は、イエスはここにはいな	⇒この若者は神様の使いであり、イエスの所在を女性たちに教える。それを聞いて女性たちは

	いこと、復活して生きていることを告げる。	すぐに走り出す。
11	3人はペトロをはじめとする弟子たちが隠れている家の戸をたたく。イエスは復活して生きていることを皆に知らせる。	⇒弟子たちは、イエスの復活が信じられないと言う。しかし、ペトロとヨハネは墓に向かって走り出す。
12	その日にイエスは次々と弟子たちの前に復活した姿を現す。イエスは、復活の喜びを全世界の人々に知らせるようと、その場にいる皆に託す。	⇒イエスが元気で神々しい姿で皆の前に現れる。イエスの十字架と復活の喜びが、現在の私たちのところにも伝えられてきていることが分かる描き方である。

考 察

冒頭は十字架上のイエスの死から始まり、重々しい雰囲気であるが、人々や女性の会話から、聖書の本質に迫る内容をくみ取ることができる。それぞれの人物の人間的な感情や思いにも触れられていることから、観客である子どもは共感しやすいだろうと思われる。話の起承転結が分かりやすい作品であり、他の作品と比べて明らかに特徴的なことは、話の終わりに復活のイエスの姿が堂々と描かれていること、それにより観客に安心感を与える終わり方である。

紙芝居のケースには、目標、解説、使い方について書かれている。解説には、「中心は、イエスの死から命への復活の喜び」であるとの記載がある。子どもにとっては、死んだ者がよみがえることは、それほど違和感なく受け入れられるものかもしれない。単純に体が生き返ったのではなく、イエスの復活が私たちにどのような意味をもたらすものなのか、解説欄に書かれている点をふまえて演じ手は語る必要がある。

聖書との整合性

イエスの死から命への復活の喜びが、登場人物の言動や心情から読み取ることができ、読者は話の世界に入り込むことができる。イエスは、十字架にかかるという苦みの極限であっても、罪人のために祈り、心から愛する態度を示した。このような愛と赦しによって人々にもたらされる平和と喜びは、紙芝居だからこそ子どもたちに伝わるとと思われる。

本作品は、聖書箇所であるマタイ 27:57～28:10だけでなく、マルコ 15:21～、ルカ 23:32～、ヨハネ 19:18～についても、作品の土台になっていることから、演じ手に対し該当箇所はすべて読むようにとの指示がある。実際に、紙芝居の台本を作るにあたりこれらの4つの福音書から、紙芝居の物語に添う箇所を適宜採用していることが特徴的である。

作品 4. 「弟子の足をあらう」文・中島 善子、絵・藤本 四郎

キリスト教視聴覚センター、1994 年〔聖書箇所 ヨハネによる福音書 第 13 章 1～21 節〕

場面	本文より要旨を抜粋	気付いた点
1	<p>過越祭の前の日に、イエスは弟子たちと一緒に食事をとっている。弟子たちはにぎやかに会話をしているが、イエスだけは黙っている。これは、イエスが近いうちに十字架にかかることを予感して、今後の弟子や人々のことを考えていたためである。</p>	<p>⇒食事の場面である弟子たちの様子は、和気あいあいとした楽しい時間が流れている。その中で、イエスは考え事をしている。イエスの隣に座っているイスカリオテのユダは、善からぬことを企んでいる表情である。この作品の冒頭の場面から不穏な様子が観客に伝わる。</p>
2	<p>やがてイエスは立ち上がり、一人でたらいと手ぬぐいを準備する。たらいに水を入れ始める。まるで召使のような真似である。</p>	<p>⇒イエスの行動を見た弟子たちは、非常に驚く。そして口々にイエスはこれから何をするのだろうと、イエスの動きに目を見張る。</p>
3	<p>イエスは弟子たちを順番に並ばせ、一人ずつ足を洗っていく。弟子たちは戸惑い、口々になぜイエスが召使の仕事である足を洗うことをするのかとささやき合う。</p>	<p>⇒イエスは笑顔で温かい言葉をかけ、一人ずつ弟子の足を洗う。弟子たちは困りながらもイエスの導きに応じる。両者の表情が対照的に描かれている。</p>
4	<p>最後はシモン・ペテロの番である。イエスの行為に納得がいかなかった彼は、思い切ってなぜ足を洗うのかと尋ねる。それに対しイエスは、「今は分からないだろうが、後で分かるようになる」と答える。</p>	<p>⇒シモン・ペテロとイエスのやりとりを、弟子たちもその場で聞いている。イエスの言葉は、この場面を読んだ観客も腑に落ちないシーンである。</p>
5	<p>しかし、ペテロは引き下がらずに、私の足を洗わないでほしいということ、これは召使の仕事であるからと懇願する。</p>	<p>⇒絵はペテロ一人を大きくクローズアップさせた描き方である。ペテロの切実な訴えが伝わる。</p>

6	<p>イエスはペテロを見つめ、毅然とした態度で「もしもわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたはわたしとあなたの関係もなくなります」と言う。</p>	<p>⇒イエスの言葉に対し、ペテロは自分とイエスとの関係がなくなってしまうことに不安を感じて、それならば足だけでなく手も頭も、全部洗って欲しいと述べる。</p>
7	<p>イエスは弟子たちを前にして、足だけを洗えばきれいになっていること、しかし、ここにいる皆がきれいになっているわけではないと、毅然とした態度で述べる。</p>	<p>⇒弟子たちは真剣な様子でイエスの言葉を受け止めている。その中で、後にイエスを裏切ることになるイスカリオテのユダは、後方で斜に構えてイエスを眺める。</p>
8	<p>イエスがペテロの足を丁寧に心を込めて洗う場面である。そして、読者に対し、「どうして先生であるイエスさまが、召使いのようになって、弟子たちの足を洗うのでしょうか」と問いを投げかける。</p>	<p>⇒ペテロは祈るように両手を組み、畏れかしこまった様子である。</p>
9	<p>全員の足を洗い終えたイエスは、弟子たちと一緒に食卓に着く。そして、これからはお互いに足を洗い合うようになってほしいと願っていること、そのために手本を示したのだと諭す。</p>	<p>⇒弟子たちは神妙な面持ちでイエスの話を聞く。その時、イエスの隣に座っているユダは、イエスから視線を逸らして居心地の悪そうな様子である。</p>
10	<p>先のイエスの言葉に対し、弟子たちは口々に自分の意見や思いを言い合う。</p>	<p>⇒弟子たちには、イエスの言葉の意図が理解できないようだ。彼らの正直な気持ちが読者に伝わる。弟子たちの発言は、読者への揺さぶり発問とも考えられる。</p>
11	<p>イエスは言葉の冒頭に「はっきり言っておきます」と前置きをした上で、「わたしが足を洗ったことを忘れず、あなたたちも同じようにしなさい」ときっぱりと述べる。</p>	<p>⇒イエスは弟子たちの正直であり人間的な本音を受け止めたのであろう。イエスのこの進言を聞いた弟子たちは耳を傾けた。しかし、ユダだけは恨めしそうに心で不満をつぶやく。</p>
12	<p>イエスは、近い将来、弟子たちの一人が自分を裏切るとはっきり公言する。</p>	<p>⇒最後の絵は、イエスと弟子たちとの食事の場面である。ユダだけが不服そうな表情であり、その他の弟子はイエスの話に真摯に向き合う様子で描かれている。</p>

考 察

イエスの弟子に対する言葉と、それを聞いた弟子の行動や心の動きを詳細に書いている。弟子たちはイエスの言葉に戸惑いや葛藤をもちながらも、師であるイエスに従おうと努めている。その中で、唯一、イスカリオテのユダは、心の中にイエスへの裏切りを予期させている。また、その表情や言葉遣いから不穏な空気を感じられ、冒頭の部分から最後の場面まで一貫している。これにより、観客である子どもたちにも、他の弟子たちとは明らかに態度が違うユダの特徴が

印象づけられるであろう。

作品の文中には、この後イエスはユダに裏切られて、十字架につけられることを知っていたこと、それでもイエスはユダの足を洗った結末になっている。ともすると、観客である子どもたちは、イエスはいい人、ユダは悪い人という短絡的な捉え方をしてしまうとも考えられる。そのため、そのような子どもの思考の特性を踏まえ、この聖書の話の意図するところを保育者が導く必要があるだろう。

一つの例としては、観客が年長児であれば、自分自身をユダに置き換えて、身近な友達との関わりを例に考えることも可能ではないだろうか。例えば、仲の良い友達と今までは一緒に遊んでいたが、いざこざをきっかけにして、もうこれからは一緒に遊ばないと決めて、友達を仲間外れにするようなことがなかったか、子どもに問いかけることもできよう。あるいは、人間は簡単に人との関係性を断つ弱さをもっているが、神はそのような方ではなく私たちを愛する方であると、話すこともできる。

結論としては、本作品の目標である「奴隷のようになって弟子の足を洗うことをとおして、イエスさまはどこまでも人を愛して仕えてくださることを示されます」という趣旨が子どもに正しく伝わるような保育者による解説や言葉の補足が必要になるだろう。

聖書との整合性

足を洗うというイエスの行為が、単にその行動そのものだけを示すのではなく、自分の身近な人に仕え合い、愛し合うというイエスの勧めであることに着目することができる。

現在の私たちの生活様式では、大人が子どもの足を洗うことはあっても、大人同士の間では、お互いに足を洗い合うことは日常的ではない。そのため聖書の時代では、召使いが主人の足を洗うことは、ごく当たり前のことであったという説明があると、子どもは当時の暮らしぶりを想像しやすいだろう。

弟子の足を洗う場面は、聖書ではヨハネによる福音書(13:1～21)にのみ書かれている。ユダの裏切りの予告を記した最後の晩餐の場面は、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの4福音書全てに記されている。

一般的に多くの人々に知られた、最後の晩餐の話が、イエスが弟子の足を洗う話と同じ日の出来事であり、繋がりを持っていることはあまり知られていないと思われる。そのようなことを踏まえると本作品は、弟子の足を洗うイエスと、後に十字架にかかることを一連のキリスト教のメッセージとして取り扱っていることは大変興味深く思われる。

作品5. 「イエスさまのくるしみ」文・景山 あき子、絵・藤本 四郎

キリスト教視聴覚センター、1994年〔マルコによる福音書 第14章12節～第15章22節〕



キリスト教紙芝居における福音的観点からの考察（5）

場面	本文より要旨を抜粋	気付いた点
1	イエスと弟子たちは過ぎ越しの食事を終えて感謝の祈りを捧げる。間もなくイエスは真面目な顔で祈るために外へ行こうと先頭を切って出ていく。ユダの姿は見られない。	⇒イエスは真面目な表情であるのに対し、弟子たちは賑やかに話をしながらイエスについていく。
2	イエスは3人の弟子たちに今から自分が神様に心を向けて祈ること、そしてあなたがたも神の御心に沿った行いができるように祈りなさいと諭す。そして、弟子たちと少し離れたところで一人で祈り始める。	⇒この弟子たちは聖書によれば、ペトロ、ヤコブ、ヨハネの3人である。イエスの言葉の意味がよく分からないが、「はい」と返事をする。
3	イエスは額から汗を流しながら、ひざまずいて祈っている。ところが弟子たちは寝入ってしまう。	⇒イエスは苦しみながら祈りを捧げている。弟子の姿は、食事を終えて眠くなる人間の弱さを現していると思われる。
4	祈りが終わってイエスが立ち上がり歩き始めると、急にユダと剣や棒を手にした大勢の人々が登場する。ユダがイエスに挨拶をしたことを合図に、人々はイエスを縛り上げる。	⇒不穏な場面になり、読者には緊張感を感じさせる話の展開である。弟子たちは怖くなってその場を離れ、逃げてしまう。
5	弟子たちは逃げてきた場所で火を焚き暖をとっている。通りかかった女性がペトロに対し、この人はイエスと一緒にいたのではと尋ねる。ペトロは「とんでもない。わたしはそんな人に会ったこともありません。」と嘘をつく。	⇒絵の手前には、3人の弟子と女性が描かれ、女性に問い詰められて困った顔のペトロが表れている。彼らの向こうには、イエスが捕らえられて大祭司のところへ誘導される場面が描かれている。
6	ペトロは一人で外に出て、イエスのことを知らないと言ってしまったことを悔やんで泣く。	⇒ペトロも保身のためとはいえ、自分の軽率な言動を心から反省し、心から悔い改めている。
7	大祭司はイエスに対し、本当に神の子なのかと尋ねる。イエスは「その通りです」とはっきり答える。人々は、それを聞いてイエスを死刑にするよう声を上げる。	⇒大祭司と人々を前にして、イエスは毅然とした態度で答えている。
8	兵士たちはイエスを馬鹿にした言動で攻撃する。イエスは何も言わずにただ黙って耐えている。	⇒観客である子どもには、兵士の非人道的な言動が肯定的に子どもに伝わらないよう配慮しなければならない。紙芝居ケースに書かれている「落ち着いたイエスの態度を感じ取れるように」心掛けたい。

9	次に、イエスはローマの総督ピラトの前に連れていかれる。ピラトと人々、イエスとのやりとりがなされた末、ピラトはイエスに「この人は、なにも悪いことをしていない」と宣言する。	⇒イエスは、自分はユダヤ人の王であり、皆を神の国へ導くために来たのだとはっきり言う。ピラトのイエスは無罪であるとの言葉には、読者も安心感を抱くだろう。
10	しかし人々は、自分を神の子であるというイエスを十字架にかけよう騒ぎ立てる。	⇒ピラトは当初は、イエスの無罪を主張していたが、人々の勢いに屈してしまい、役割を放棄する。
11	イエスは兵隊たちによって茨の冠を被せられ、大きな十字架を背負うことになる。	⇒茨の冠によってイエスの額から血が流れてきた場面では、「あまり感情的にならず淡々と語る」ようにとの補足説明がある。残酷なシーンのため、子どもたちに不安を与えないようにとの配慮であろう。
12	兵隊や多数の人々が見守る中、イエスはゴルゴタの丘に向けて重い十字架を背負い、苦しそうに歩く。そこへ通りかかったシモンが兵士に命令されて十字架を担がされる。	⇒兵士からの侮辱を受けたイエスは、重い十字架を担ぐことが難儀である。また、人々の中には、イエスを心配そうに目を離さずに凝視している者もいる。

考 察

紙芝居のケースには目標、解説、使い方が書かれており、演じ手の導きとなる。特に、使い方の欄に書かれていることは作品を読むうえで、大いに参考になるだろう。本作品はイエスの受難である十字架への道を扱った話として、内容が非常に重く、人の罪の極限を描いているがゆえに、この紙芝居を観た子どもたちが不安を抱いてしまう恐れがある。話の結末も余韻が決して明るいものではなく、子どもにとっては不安が残る終わり方である。そこで、ケースの使い方に書かれているように、「①あまり悲壮的にならず、涙よりも、イエスの心を感じとり、安心感をもつように ②落ち着いたイエスの態度を、感じとれるように ③弟子たちにも、私たちにも、こんな大切な苦しみを共感させて下さるイエスのやさしさ、兄弟的愛を伝えるつもりで、上演」することが大切であると思われる。

聖書との整合性

本作品は、紙芝居ケースの解説欄に、マルコ14:12～15:22を中心に、マタイ26:17～27:32、ルカ22:31～23:26を全て読むようにとの指示がある。

聖書の内容に沿って、イエスの苦しみや神の子としての人々への愛と赦し、弟子や人々の心の動き、兵士の非人道的な行動が、子どもたちに分かりやすくまとめられている。紙芝居という視覚的な性質上、子どもたちが純粋な感性で話を受け止めるあまり、ともすると本作品が恐怖感の残るお話になってしまわないような、十分な注意が必要である。そのためには、次の2点に配慮したい。1つ目は、殺伐としたシーンは感情を込めずに淡々と読むこと。2つ目は目標欄に書かれている「イエスの受難は、父なる神の深いみ心であり、私たち人間に対する愛の結果であることを知る。」を目指し、保育者による補足説明を加えることである。

4. 考察とまとめ

今回分析を行った作品は、聖書の記述に沿った内容構成で書かれていた。5つの作品のうち、4つの作品において、冒頭に「目標」が掲げられている。これにより演じ手は、観客に何を伝えたら良いのか、話の核心を明確に把握することができる。また、聖書を子どもの生活に身近なものとしていくためには、読んだ後、観客との対話を通して話の振り返りや、内容の深まりを味わう時間も必要であると考えられる。

5つの作品それぞれに書かれた「目標」を分析すると、神の愛と赦し、十字架上の死と復活が共通点である。これらは聖書の教えの核心でもある。

筆者は、これまでの一連の福音紙芝居研究（尾上・柴田 2014、2015、柴田 2016、2019）において、聖書理解をより深める手立てとして、レギーネ・シントラー著『聖書物語』における分析を行ってきた。本研究でも同様に原著を用いることとした。原著では、「ゲッセマネ」「大祭司の屋敷で」「ポンテオ・ピラト」「ゴルゴタ」「イエスは生きている」というタイトルで、十字架の死と復活についての記述がある。

「ゲッセマネ」¹⁾では、ユダの裏切りにより、イエスがローマ兵に捕らえられる場面である。結局、ユダ以外の弟子全員も、誰一人として最後までイエスのそばにいる勇気を持ち続けることができなかった。弟子たちは、イエスが前に言っていたように逃げ出し、四方八方、夜の闇に消えていったと書かれている。このことから、先の最後の晩餐の場面では、ユダ一人が裏切りをするであろうと読者は考えるが、イエスはユダだけでなく、全員の弟子から裏切られるということも予感していたのかもしれないと、文面から推測ができる。

「大祭司の屋敷で」²⁾では、大祭司カイアファの屋敷の中庭で、イエスの弟子であるペテロが、召使いたちの話に耳を傾ける場面である。ペテロは、イエスの身に何が起きるのか大変気がかりだった。召使いのひとりから、ペテロは自分がイエスの仲間であることを指摘されて、私はイエスのことを知らないと言った。弟子として常にイエスに同行し、行動を共にしていたペテロがイエスを裏切ることから、悪気はなくとも人間の心や行動は変化する場合がある。このような人の弱さが描かれている。

「ポンテオ・ピラト」³⁾では、城の場面で多くの群衆たちが密集している。当初、総督ピラトはイエスに刑を下すことに躊躇していた。しかし、群衆たちの叫び声に圧倒されてしまい、冷静な判断を失う。結果として十字架刑が決定する。群衆たちが帰っていった静けさの中で、ピラトは自問自答する。「イエスはなぜ、何もこたえなかったのだろう？ どうして、弁解しなかったのだろう？・・・（以下、略）」この問いかけは本文を読んだ全て

の人々に投げかけられている。

「ゴルゴタ」⁴⁾では、イエスの行方を追って、女はゴルゴタへ向かって人ごみの中を進んでいく。気持ちを奮い立たせてようやく十字架上のイエスのもとにたどり着く。磔にされたイエスの姿はもちろんのこと、祭司や律法学者たち、周りの人々のイエスに対する暴言を見て、女は耐え難い苦しみにひざまずく。弟子たちを探す、姿はどこにもない。女は自分と同じようにイエスの苦しみをみつめている2人の女たちに出会い、イエスが葬られた場所を誰にも気づかれないように確認して、町へ戻っていく。イエスの一部始終を見守り続けている女の心情に焦点を当てた書き方である。

「イエスは生きている」⁵⁾では、マグダラのマリアが主人公として書かれている。他の2人の女たちと共に、イエスが葬られた墓に行き、空になった棺桶を見たのち、天使と出会う。天使から復活のイエスの話を聞いて喜んでそのことを人々に伝えようと、弟子たちがひそんでいる家を訪れる場面である。マリアの悲しみが驚きに、そして喜びに、讚美に変わっていく心の動きが適切に書かれている。

これらの分析から、次の点が考察される。聖書での記述が事実や出来事を中心に書かれていることに対して、これらの『聖書物語』の中で共通して言えることは、登場人物の心情や心の動きに焦点を当てている点である。当時起きた出来事を目の当たりにした人々の気持ちを、読者が追体験できるような描き方をしているということである。本著は子どもが対象ではなく、大人向けに書かれている。そのため、保育者は子どもに紙芝居を演じる前の事前準備として、活用することが期待できる。聖書に興味をもつ保育者であれば、自身が見識を広げるためにより理解が深まるだろう。

本研究では、紙芝居の作品の内容についての分析が中心であり、これらを保育そのものに用いることについては触れることはできなかった。この点については今後の課題である。

<引用文献>

- 1) レギーネ・シントラー作・下田尾治郎訳『聖書物語』福音館書店、1999、p. 253～255
- 2) 同上、p. 256～258
- 3) 同上、p. 259～261
- 4) 同上、p. 262～265
- 5) 同上、p. 266～267

<参考文献>

- ・『NTD 新約聖書註解（4）ヨハネによる福音書』、1975
- ・『NTD 新約聖書註解（1）マルコによる福音書』、1976
- ・『NTD 新約聖書註解（3）ルカによる福音書』、1976
- ・『NTD 新約聖書註解（2）マタイによる福音書』、1978
- ・『聖書』新共同訳、1987
- ・レギーネ・シントラー、加藤善治・茂 純子・上田哲世訳『希望への教育 子どもとキリスト教』日本基督教団出版局、1992
- ・赤崎ユリ子・尾上明子・茂 純子・松浦八恵子『キリスト教保育を学ぶ方のために レギーネ・シントラーの「希望へと育む」～要約と解説～』名古屋聖文舎（取り扱い）、pp.14 - 15、2004
- ・柴田智世、尾上明子「キリスト教紙芝居における福音的観点からの考察－新約聖書を中心に－」『名古屋柳城短期大学紀要』第36号、pp.71 - 83、2014
- ・尾上明子、柴田智世「キリスト教紙芝居における福音的観点からの考察（2）－クリスマス物語を中心に－」『名古屋柳城短期大学紀要』第37号、pp.55 - 67、2015
- ・柴田智世「キリスト教紙芝居における福音的観点からの考察（3）－ノアの箱舟の物語を中心に－」『名古屋柳城短期大学紀要』第38号、pp.127 - 137、2016
- ・柴田智世「キリスト教紙芝居における福音的観点からの考察（4）－羊を扱った作品を中心に－」『名古屋柳城短期大学紀要』第41号、pp.205 - 216、2019

A Study on Christian Kamishibai from an Evangelical Perspective(5): With a Focus on the Work about the Sufferings and the Resurrection of JESUS

Shibata, Tomoyo*

本研究では、キリスト教の福音紙芝居を保育に取り入れる際の一つの方向性として、キリストの受難と復活を扱った紙芝居作品を取り上げ、聖書に基づいた内容の分析と、子どもに語る際の聖書からの福音的視点を示すことを目的として研究を行った。

その結果、全ての作品において聖書の記述に従った内容構成で書かれており、観客である子どもたちに福音的なメッセージ性をもつものであった。課題としては、当該聖書箇所の意味を子どもに伝えるとともに、今後は、紙芝居の有効的な活用の方法を提示していくことである。

キーワード：紙芝居, キリスト教, 受難, 復活

*Nagoya Ryujo Junior College

